

# 社会人類学と開発援助をより密な関係に



松園 万亀雄  
国立民族学博物館館長

1974年にエチオピアの地を踏んでから33年。ケニア農村の民、グシイ族をはじめ、東アフリカの民族研究に尽力してきた社会人類学者の松園万亀雄さん。現地では幾度となく青年海外協力隊などの援助関係者との出会い、そのたびに社会人類学と開発援助の結び付きの希薄さを感じていた。

今年11月、国立民族学博物館（みんぱく）は開館30周年を迎えた。2003年の館長就任以来、世界や日本国内の変化に合わせてみんぱくを生まれ変わらせるべく、さまざまな知恵とアイデアで革新の道を切り開いてきた松園さん。そして今、社会人類学と開発援助のより密接な関係を築こうとJICAとの連携強化に関心を寄せている。

（続きは裏ページへ）

## 「よりよく現地の 社会と人を知る」

国立民族学博物館館長

### 松園 万亀雄

Matsuzono Makio

1939年長崎県出身。社会人類学者。東京都立大学大学院社会科学科博士課程単位取得満期退学。天理大学教養部、武蔵大学人文学部、横浜国立大学教育学部などで助教授を務めた後、東京都立大学人文学部教授、長崎県立長崎シーボルト大学国際情報学部教授などを歴任。著書は『文化人類学 - 文化的実践の探求』（共編著、日本放送出版協会）『グシイ・ケニア農民のくらしと倫理』（弘文堂）など多数。2003年より現職。



photos by Otsuka Masataka

「多文化共生」の取り組みが求められる中、国立民族学博物館（みんぱく）では、新たな研究課題の開拓に加え、博物館の展示方法を地域・国の変化が世界全体の流れの中で分かるように変えていこうとしています。地域・国の紹介のみならず、周辺国との関係や、日本で暮らすその国の人々の生活にも触れながら、来館者が知りたい順に見て回れるよう、館内の工夫に努めています。案内表示も今は日本語だけなので、英語や中国語、韓国語も必要でしょう。JICA地球ひろばに負けないようにと（笑）頑張っているところです。

日本は欧米と比べて、社会人類学と開発援助、国際協力がなかなか結び付かないとずっと感じていました。私のような社会人類学者が途上国で調査していると現地の住民から間違われるんですよね、「あなたJICAでしょ？」って。「違う」と答えても、「どうしたら援助してくれるの？」と問われる。ですから、そうした現地の人々の声を援助関係者に届けることで、社会人類学と開発援助をつなぐことができると思っています。私たちも援助の役に立てればという気持ちがありますし、JICAにも社会人類学者の声にもっと関心を持っていただきたいですね。

みんぱくでは1993年から年間約10人のJICAの研修員を受け入れ、学芸員の育成に協力しています。会談で緒方貞子理事長にもお話しましたが（45ページ参照）、研修員の帰国後も、彼らの活動をみんぱくの研究者がサポートしました。これがネットワークの構築・拡大にもつながっています。

こうした研修に限らず、JICAに

はもっと私たちを活用してほしいですね。特に若い研究者を。最近では開発援助が現地の社会・文化に与える影響に関心を持つ研究者が増えています。青年海外協力隊の派遣前訓練の講師として、またプロジェクトの評価チームの一員としてでもいい。社会人類学者が開発援助の世界で実践的な仕事をする機会が増えればと思っています。

アフリカがフィールドの私にとって、JICAがアフリカ重視の姿勢で取り組んでいるのはうれしいことです。「住民参加」「草の根」といった社会人類学と通じる言葉を多用するようになったことも大きな変化だと思います。ただ、住民参加型の支援は一つ一つの規模が小さい割に投入する人材が多く、インフラ整備など大規模な援助と比べて人件費が高いと指摘されることもある。それでも私は、費用対効果ばかりを気にせず、このような支援をもっと推進すべきだと思います。日本人が現地の人々とともに彼らが困っていることについて考えること自体、価値のある援助ではないでしょうか。

現在の制度では、協力隊やシニア海外ボランティアには、一定の技術や経験が求められますが、私は、現地の人との相談に乗るようなボランティアがいてもいいんじゃないかと思うんですね。住民の話をもじっくり聞いて、そこから問題を掘り起こし、一緒に考え、解決に向けて取り組んでいく。そうしたボランティアを拡充し、住民と日々の生活を共にすることで、よりよく現地の社会を知り、人を知ることができれば、援助の効果も一層高まるのではないかと思います。